

専門日本語教育における自己主導型学習の可能性 —学習者による‘私の’専門語彙の抽出とリスト化—

伊藤 秀明¹

海外の高等教育機関もしくは日本の高等教育機関に在籍している日本語学習者数は年々増加傾向にある。そのため、日本語を用いて専門的な学習や研究を行っている日本語学習者の専門分野も広がり、日本語教師の専門分野に関する知識に頼った教師主導型の専門日本語教育では限界が見えてきている。

そこで国際交流基金関西国際センターでは、2013年度文化学術専門家日本語研修で Web ツールを利用した自己主導型学習による「専門語彙」の授業実践を行った。本実践の特色は、①専門語彙の学習を自己主導型学習として捉え、学習者の「必要な文献を読みたい」という直接的ニーズに応えると同時に、自身の研究に即戦力となる「今、必要な」専門語彙リストを短時間で作成することができる、②専門語彙の意味について文献内の文脈での意味理解を促し、カテゴリー分類することで専門語彙としての意味と用法への新しい気づきが生まれる、③手法に汎用性があるため、学習者にとっての自律学習能力の意識化に加えて、他機関の日本語教師にとってもすぐに応用可能なものである、という 3 点である。本実践を踏まえて、技術の進歩と人と人とのつながりを有効活用することで、専門日本語教育においても自己主導型学習が可能であることを述べた。

キーワード：自律学習、自己主導型学習、専門日本語教育、専門語彙、Web ツール

1. はじめに

現在、海外で高等教育機関に在籍する日本語学習者数は 106 万 2406 人¹⁾、日本国内の高等教育機関に在籍する留学生の数も 13 万 3492 人²⁾に上る。高等教育機関に在籍するすべての者が日本語を用いて専門的な学習・研究をしているわけではないが、高等教育機関に在籍し、日本・日本語と接点を持っている人の数が年々増加している現状を考えると、日本語を用いて専門的な学習・研究を行っている日本語学習者の専門分野も広がってきていることは容易に推察できる。このような多様な学習者が多様な専門分野について学ぶということは、専門日本語学習のニーズへの対応だけではなく、学習者個人個人に合わせた対応が必要となってくる。しかしその一方で、多様な学習者と日々接する日本語教師の数は限られており、一人の日本語教師が学習者個人個人の専門分野に合わせて、学習者に必要な専門日本語をすべて把握しておくというのは現実的に

考えて難しい。たとえ、複数の専門分野を持った日本語教師が数名集まったところで把握しきれぬ分野にも限りがあり、特に専門日本語教育の現場では、教師からの知識伝達を中心とした教師主導型学習を続けているのはすぐに限界が見えてしまう。このような学習の個性化への対応について、田中・斎藤³⁾は学習者の多様性を、①集団カテゴリーとしての多様性、②学習ニーズの多様性、③個人の経験や文化的背景などの学習特性の多様性、の 3 つに分類した上で、①、②については、従来、特有のカリキュラムや教授法の開発、コースデザインの工夫によって対応してきたが、③のような学習の個性化への対応には「自律的学習能力」の育成が必要不可欠であると述べている。

以上のような現状を踏まえると、約 20 年前に小山⁴⁾が述べた「学習ニーズが多様化している昨今、学習者自身が学習を自己管理できるようになることは必要不可欠である。」という提言の重要性は今もなお失われておらず、「自律学習^{註1)}」という点について改めて

¹国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員

意識し、実践していくことが必要であると思われる。そして、自律学習能力をどのように育成していくのかを意識し、自己主導型学習^{注2}を実践していかなければ日本語教師の限られた知識内でしか専門性を発揮できない学習者を生み出し続けてしまうことにもつながる。こうした危機感は先ほども述べたように、日本語教育の分野では約20年前から存在しており、現在では自律学習能力に関する理論的な研究やその理論的背景を踏まえた実践・取り組みが様々な教育現場で行われている。その一方で自律学習の研究では、自律学習能力の側面に焦点が当てられることが多く、自律学習能力を育成する上での自己評価表の有効性やポートフォリオを用いたことでの意識・態度の変化を調査するなどの形式的な素材を用いた実践は多いが、教室場面で言語知識の導入とともにどのように日本語学習者の自律性を養っていくのか、日本語学習者が自立的に学習項目を選んで学んでいくにはどうしたらよいのか、など日本語教育における自己主導型学習について述べられている実践は少ない。

そこで本稿では、国際交流基金関西国際センターの2013年度文化学術専門家日本語研修で行われた自己主導型学習による専門語彙学習の授業実践について報告した上で、専門日本語教育における自己主導型学習の今後の可能性について述べる。

2. 専門語彙学習

2.1 文化学術専門家日本語研修

事例の専門日本語コースは、国際交流基金関西国際センターの提供する文化学術専門家日本語研修6ヶ月コースで、大学院生、研究者、司書、学芸員を対象としている^{注3}。研修の参加者は研究活動及び専門業務上、日本語の習得を望む者であるため、研修では各自の資料読解や成果発信等を支援する授業が行われている。しかし近年、基礎となる専門語彙の知識不足により論文読解や発表原稿執筆に支障をきたす例が少なからず見受けられ、専門語彙の習得が課題となっていた。そこで、2013年度の本研修では、新規科目として「専門語彙」を開講することとした。だが、研修参加者の専門は文学・人類学・民俗学・法学・経済学・美術史学など多岐にわたり、門外漢の日本語教師が習得すべき

語彙を選択・特定することは困難である。たとえ語彙が特定できても、クラスで各人が同時にそれぞれの専門語彙を学ぶことは容易なことではない。さらに、Tudor⁵⁾が「使用のために教えることと実際に使用されている言葉の間には相違がありうる。誠心誠意対応したとしても、時に私達は学習者に単に必要なものを教えているかも知れず、それによって学習者の学習時間を有効活用していないかもしれない。」(筆者訳)と述べ、場合によっては適切ではない形を教えている可能性も指摘していることから、門外漢である教師が安易に専門分野における学習項目を決定することで学習効率を低下させてしまう可能性についても注意しなければならない。

そこで、本研修における「専門語彙」の授業では学習者自身が各自の専門文献から語彙を抽出し、体系化し、リストシェアリングにより語彙の習得を図る自己主導型学習のクラスをデザインし、実施した。

2.2 専門語彙とは

専門分野内での語彙については、専門分野別の語彙調査や分類に関する研究・報告が多数なされており、そこでは「専門語」、「専門用語」など同義でいくつかの語が使用されている。宇井・天笠・北川⁶⁾では「専門語は対象とする分野の文書において高頻度で出現し、他分野の文書では出現しない若しくは頻度が低い」ものとしている。第一言語の語彙習得であれば宇井・天笠・北川⁶⁾が述べているように、一般語彙から学術語彙へ、学術語彙から専門語彙へ、と当該分野では高頻度で出現し、他分野では出現しない若しくは頻度が低いものという捉え方が可能である。しかし、第二言語の語彙習得の場合、一般語彙、学術語彙、専門語彙の区別が必ずしも明確に存在するわけではなく、「神」が宗教学の専門語彙、表記を変えて「カミ」となると民俗学の専門語彙となるように、特定専門外の者にとっては一般語彙として認識される語彙も、特定専門分野の専門家にとっては専門語彙となりえるのである⁷⁾。

そこで本稿では、第二言語教育における専門語彙を「学習者が研究活動および専門業務上、必要とする語彙」と定義し、用語は本稿で述べる研修の授業名である「専門語彙^{注4)}」とする。

2.3 専門語彙学習の課題

近年、専門語彙を特定する場合、日本語教育の分野に限らず、専門分野の基礎文献から頻出語を調査するもの⁸⁾⁹⁾から、コーパスを利用して頻出語を特定する手法が一般化してきている¹⁰⁾⁻¹²⁾。コーパスを利用して頻出語を特定する手法とは、特定分野の数十本の学術論文をテキストデータ化し、大規模コーパスを作成した後、その大規模コーパスから頻出語彙などを抽出し、専門語彙を特定する方法である。しかし、この特定方法は分野ごとに大規模コーパスを作ることが前提とされており、日本語教師が個人レベルでコーパスを作成し、学習者に合わせた専門語彙を特定するには、相当の技術と労力が必要とされるため、一般的に使用できる方法とは言いがたい。そして、このように作成したコーパスも分野が異なれば、また別のコーパスを作らなければならない。他分野の学習者が同時に参加する日本語教育の現場では（多くの場合がそうであると思うが）、目の前の学習者に適した専門語彙を提示することは難しい。また、大規模コーパスから専門語彙を特定していくことは、ある分野の専門語彙の全体像を明らかにしていくという点で非常に有意義なことであるが、何らかの専門を持つ日本語学習者について、新城・金井¹³⁾が「それぞれの分野で彼らは、周囲の日本人学生たちと同等に（日本語で書かれた）専門文献を読んでいかねばならない。それには何よりも読むスピードが要求されるだろう」と述べているように、学習時間の限られた学習者にとって、各人の専門分野を深めていくためには、日本語で書かれた文献の内容をいかに早く読み取れるかが大きな課題となる。そのため、ある分野の専門語彙の全体像よりも「今、読んでいる文献に出ている専門語彙を知りたい」というのが学習者の本音であろう。

3. 実践

3. 1 本実践の目的

文化学術専門家日本語研修6ヶ月コースで行われた「専門語彙」の授業は、受講者数11名、週1回100分の授業で8回、6ヶ月コースの前期に提供した（表1）。研修では、6ヶ月という短い期間で自身の設定した特定研究課題について研究取材をすすめ、成果報告を行わなければならない。そのため、研修前期に行

表1 「専門語彙」の授業

	内容
1	クラス説明・専門語彙抽出文献検索
2	専門語彙リスト 作成 1回目
3	専門語彙マップ 作成・シェア
4	専門語彙リスト 作成 2回目
5	専門語彙リスト シェア 1回目
6	専門語彙リスト 作成 3回目
7	専門語彙リスト 作成 4回目
8	専門語彙リスト シェア 2回目

われる「専門語彙」の授業では、研修生が自身の研究に即戦力として使える専門語彙を効率的に学ぶ必要がある。さらに、「専門語彙」の授業後も研究は続くことから、自己主導型学習を促し、後期においても各自で専門語彙の習得を自身で行っていきける能力を身につけることも必要となる。そこで、「専門語彙」では専門語彙リストの作成法の習得と現段階で自身に必要な専門語彙リストの作成を目的とした。

3. 2 「専門語彙」の授業の流れ

「専門語彙」の授業は、具体的には以下の流れで行った。

- ①語彙抽出元となる各自の専門文献をWeb上で検索し、特定
- ②東京大学開発のWebサイト「言選Web」^{注5)}を使用してキーワードを抽出し、Microsoft Office Excel(以下、Excel)でリスト化
- ③自身の専門知識に照らし合わせてキーワードの削除・カテゴリー分類など行いつつ、各自の専門語彙リストを作成

また、語彙の体系化と定着のために、上記③のリスト作成作業と並行して適宜、マッピング作業や研修生同士によるシェアリング活動を導入した。次節では各手順について詳しく説明する。

3. 3 基本資料

本授業を行う上で一番の課題となるのが、研修参加者個人によって必要とする専門語彙が異なることである。しかし、各人が自身の専門から専門語彙を学べる環境を整えば、この問題は解消される。そこでまず、

各自が読みたい、あるいは読む必要があると思う専門文献を Web 上から選んでもらった。本実践で自身の研究にとって優先度の高い専門語彙を抽出するためには、研究に必要なテキストを的確に選ぶことが必要となるが、本研修では研修初期に図書館司書から「論文の検索方法」を学ぶ機会が用意されているため、多くの研修生が研究のキーワードなどから自身の研究についての文献を選び出すことができていた。また、数人の研修生ではあるが、研究の進度の差によりこの過程でテキスト選択が難航する場合も見られたが、妥当かつ有用なテキストの選定は自身の研究を進めていく上で重要なアカデミックスキルであり、難航しながらも行なう作業自体が一つのアカデミックスキル訓練の場となった。また、実質的な意味で選択した文献が自身にとって妥当かつ有用であるかは、日本語母語話者・非母語話者に関わらず、文献を読む前に判断することは難しい。そのため、この過程は有用な資料を適切に選ぶ力を養うということではなく、自分でテキストを選ぶ責任を持つことで研究の自律性を養うという点で自己主導型学習にとって必要な過程であった。

3. 4 キーワードの抽出

キーワードの抽出に関しては、東京大学の中川裕志教授、前田朗氏、小島浩之助手によって開発された Web サイト「言選 Web」を使用した。本サイトはユーザーが入力したテキストや Web サイトのページ (URL の入力のみ)、Word、PDF ファイルなどの文書内からキーワードを抽出し、一覧にして表示するサイトである (図 1)。このサイトの優れている点は、他の語と結びついて複合語になることが多いほど、キーワードの重要度が高いと判定され、さらにそのキーワードの延べ語数、接続の異なり語数からキーワードを抽出する際に、自動的に重要度が数値化されて付加される点にある (図 2)。先行研究の専門語彙の抽出方法では分野ごとに大規模コーパスを作成しなければならず、特定分野の専門語彙の全体像しか明らかにできなかったのに対して、「言選 Web」を使用することで、学習者が選んだ専門文献から「言選 Web」にファイルをアップロードするだけで文献内に現れるキーワードを抽出できる。さらに手法が簡略なだけでなく、あえて特定の文献の中に表れる専門語彙だけに限定することで、学

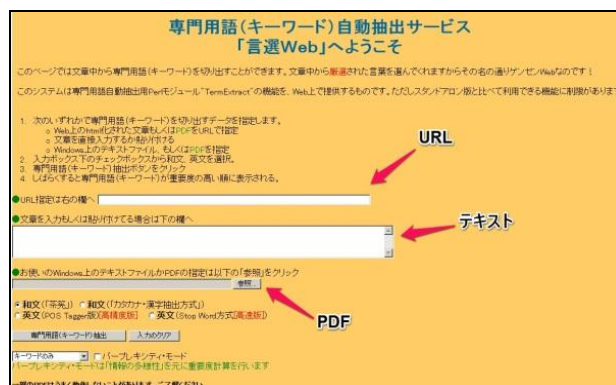


図 1 「言選 Web」

習者の「今、必要な文献に出ている専門語彙を知りたい」という直接的なニーズにも対応することができるのである。

3. 5 専門語彙リストの作成

このように 3.4 で抽出されたリストは、一見、これだけでも専門語彙リストのようであるが (図 2)、このリストはテキスト全体の中から「言選 Web」が連結度や出現頻度などから重要度が高いと判断したキーワードリストであるため、学習者にとって意味のある専門語彙リストへと変えていく必要がある。その際には、「漢字語彙が読めない」、「すでに知っている語彙が多く含まれている」など、個々の学習者が自分自身の知識に合わせた専門語彙リストへとカスタマイズしていく必要がある。そこで、3.4 で抽出したキーワードリストを一旦 Excel へと移し、自身の選んだ専門文献のキーワードをリスト化した^{註 6}。その際にキーワード

日本	79.37
国際交流基金	62.81
独立行政法人	60.25
日本語	52.44
法人	28.28
日本研究	23.53
開始	20.12
日本語教育	19.37
日本語国際センター	19.04
独立行政法人国際交流基金	18.81
国際協力機構	15.34
特定独立行政法人	14.84
研究者	13.17
関連項目	12.89
外務省	12.25
日本語学習者数	11.48
編集	11.00
関西国際センター	10.45
国際交流	10.44
事業	10.39
海外	10.00
国際文化交流	9.99
アジア	9.80
ページ	9.49
文化	9.17
施設	8.94
サイト	8.66
国立国際医療研究センター	8.26
開発者	8.03
科学技術振興機構	7.92
国際環境	7.88
産業技術総合開発機構	7.83
国際文化交流事業	7.67

図 2 キーワードと重要度の抽出

をリスト化したものを研修生自身が自分の知識に合わせ、削除・整理を行った。特に読み方がわからない漢字語彙に関しては、Excel の関数を利用して振り仮名を振る作業を行わせ^{註7}、専門語彙の意味についても文献内の文脈での意味理解を促した。また、用法における発見を促すため、カテゴリー名を付加する助言を行い、フィルターをかけることによって、カテゴリー分類による表示ができるようにした。このように自身の研究に合わせたカテゴリー分類を行うことで、例えば、建築記号論を専門とする研修参加者は建物の「材料」を「情報システム」の一要素として分類するなど、辞書的な意味とは異なる自身の専門語彙としての意味用法への気づきが見られた。

3. 6 研修生同士のシェアリング活動

各自個別のリスト作成作業に差し挟む形で数回行った各自の専門語彙のマッピング、作成中のリストのシェアリングは、他分野の研修生の語彙リストを見たり、その中の語彙について説明を受けたりする中で語彙の体系化、習得強化を刺激する仕組みとなった。本活動は田中・斎藤³⁾の述べる「外国語学習においては個別学習ではなくグループ学習によってのみ身につけることのできる能力がありうる。」という言葉通り、本活動を通して研修生同士が自身のリストには現れなかった関連語彙を学んだり、分野ごとの意味用法の違いに気づいたりするクラス内の協働学習の場として機能した。

4. 本実践でみられた特色

本実践では以下の3点の特色が見られた。

第一に、本実践では専門語彙の学習を自己主導型学習として捉え、専門語彙の抽出を大量の論文や資料から抽出するのではなく、自分自身の興味のある、または自分自身に必要な論文・資料からキーワードを抽出したため、学習者の直接的ニーズに応え、自身の研究に即戦力となる「今、必要な」専門語彙リストを短時間で作成することができた。

第二に、専門語彙の意味について文献内の文脈での意味理解を促し、カテゴリー分類することで専門語彙としての意味用法への新しい気づきが生まれた。

そして第三に、手法の汎用性が挙げられる。本手法

はExcel データとしてリストを作成したこと、既存のツールを活用したことで、研修生にとっては今後の学習に利用できるだけでなく、暗記用の他の学習リソースなどに転用しやすく、今後の自律学習能力の意識化を促す手法となり、日本語教師にとっては所属機関に関わらず、比較的簡単に応用が可能な手法となった。

5. 専門日本語教育における自己主導型学習

上記の専門語彙リスト作成の実践で教師が行ったことは学習目標の意識化への手助けとその学習目標を達成するための手法の紹介のみである。しかし、学習者は本実践を通して、何のために自分は専門語彙を学習するのかを明確にし、自分自身で解決していく手法があることを知ること（web ツールでの専門語彙の抽出）で自分の知識に合わせて学習すべき項目を吟味し（専門語彙リストの整理）、専門語彙リストを完成させた。わずかではあるが、自己主導型学習の第一歩を踏み出したのである。

専門日本語教育では、専門分野を日本語教師がカバーできない分、ともすると日本語教師の直感的な判断や教材に記載されている知識を伝えることが中心となり、語彙や表現をある意味、技術的に伝達することで専門日本語教育を行っているという誤解がある。しかし、今一度、教師は教える立場ではなく、支援する立場であるという認識を持ち直すことで教師の役割が改めて見えてくるのではないだろうか。

田中・斎藤³⁾では自律学習を支援する教師の役割として、①自律学習を助けるためのコンサルティング、②自律学習を助けるための教材づくり、が重要であると述べている。しかし、現場では自律学習を助けようとすればするほど、教師の仕事量は増大していき、支援をしたいけれど現実問題として余裕がないというジレンマにも陥りがちである。だが、そこは20年前とは大きく時代が変わった技術の発達を最大限生かすべきである。また、技術の進歩は人と人とのつながりの地理的・時間的制約を取り払いつつある。これからの専門日本語教育はまず関係者がつながることで、専門日本語教育関係者が一丸となって、所属機関の垣根を超えた学習者の専門性に特化した支援体制の強化や教材の共有など、学習者を支援する体制作りに進んでいく

ことを期待したい。

付記

本稿は、2014年3月1日に開催された第16回専門日本語教育学会研究討論会での口頭発表の内容に大幅に加筆し、書き改めたものである。研究討論会当日に有意義なコメントをくださった方々に感謝申し上げる。

注

- 注1 青木¹⁴⁾では、「自律学習/学習者オートノミー」を「学習者が自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し、結果を評価できる能力」と定義している。
- 注2 Holec¹⁵⁾では、自律学習能力と自律学習行動を区別するために、自律学習能力を行使した学習活動を自己主導型学習と呼んでいる。
- 注3 本研修は日本語能力試験N4以上または旧日本語能力試験3級程度以上の日本語力を応募要件としている。
- 注4 当センターの外交官・公務員研修における「専門語彙」の定義については石井・熊野¹⁶⁾を参照。
- 注5 「言選 Web」(<http://gensen.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gensenweb.html>) (最終閲覧日 2014年9月24日) 詳しい使用方法については前田¹⁷⁾を参照。
- 注6 Excelでのリスト化の詳しい方法は、「日本語教育通信授業のヒント」(<http://www.jpfe.go.jp/japanese/survey/tsushin/hint/201401.html>) (最終閲覧日 2014年9月24日) を参照。
- 注7 空欄のセルを指定し、「=PHONETIC (セル番号)」と入力すると、指定したセル番号の文字列の振り仮名を表示させることができる。

参考文献

- 1) 国際交流基金：海外の日本語教育の現状 2012年度日本語機関調査より，くろしお出版，(2013)
- 2) 平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果-JASSO http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data13.html (最終閲覧日 2014年9月24日)
- 3) 田中望・斎藤里美：日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—，大修館書店，(1993)
- 4) 小山悟：自律学習促進の一助としての自己評価，日本語教育，88, pp.91-103(1993)

- 5) Tudor Ian. : Learner - centredness as Language Education. Cambridge University Press, (1996)
- 6) 宇井敬一郎・天笠俊之・北川博之：単語の専門性に着目した気象学論文からの専門語抽出，宇宙航空研究開発機構研究開発報告，JAXA-RR-11-007, pp.157-169(2012)
- 7) 矢沢理子・伊藤秀明：Web ツールを利用した専門語彙学習，ヨーロッパ日本語教育，19, 投稿予定(2015)
- 8) 三枝令子・今村和弘・西谷まり：専門分野の語彙と表現 経済学・商学編<改訂版> (一橋大学学術日本語シリーズ 10)，一橋大学留学生センター，(2005)
- 9) 小宮千鶴子：留学生のための経済の専門連語の選定—中学「公民」・高校「現代社会」の教科書を資料に—，早稲田日本語研究，19, pp.1-12(2010)
- 10) 田地野彰・寺内一・笹尾洋介・マスワナ紗矢子：総合研究大学における英語学術語彙リスト開発の意義—EAP カリキュラムデザインの観点から—，京都大学高等教育研究，13, pp.121-132(2007)
- 11) 中島和郎：理学部 ESP 語彙表の試作—学術コーパスによる分野別専門語彙・共通準専門語彙の特定—，言語文化 社会，9, pp.47-66(2011)
- 12) 宮本祥子・五百蔵高浩・宮本謙三・宅間豊・井上佳和・竹林秀晃・岡部孝生・滝本幸治：理学療法分野における英語専門語彙(ESP 語彙)の抽出とその特性，理学療法学，38(6), pp.421-435(2011)
- 13) 新城直樹・金井勇人：e-learning を利用した「専門分野の語彙」学習，一橋大学留学生センター紀要，8, pp.49-58 (2005)
- 14) 青木直子：自律学習，新版日本語教育事典，pp.773-775(2005)
- 15) Holec, H.: On autonomy: some elementary concepts, In P. Riley(Ed.), Discourse and learning, Longman, pp.173-190 (1985)
- 16) 石井容子・熊野七絵：外交官・公務員研修における専門語彙の習得，国際交流基金日本語教育紀要，2, pp.15-29(2006)
- 17) 前田朗：キーワード自動抽出システム「言選 web」，漢字文献情報処理研究，6, pp.124-133(2005)

